学ぼう 歴史とロマン

地域活性化へ人材育成

「奥能登塾」開講

輪島

能登半島の歴史や魅力を学ぶ奥能登塾が六日、輪島市三井町の能登空港ターミナルビルで開講した。地域活性化に取り組む人たちの仲間づくりや情報共有の機会を支援するのが狙い。約三十人が塾生となり、地域の資源を見つめ直した。（武藤周吉）

塾長となった県奥能登総合事務所の前田正彦所長は「能登には何もないと思っていたが、一年間暮らして何でもあると気付いた。美しい景色や海と山の幸、祭りなどの伝統文化。人口減という大変難しい問題があるが、塾で横のつながりをつくり、仕事に生かしてほしい」と呼び掛けた。

第一回の講義では、珠洲市飯田町の西勝寺で住職を務める西山郷史さんが「能登国千三百年　民俗・歴史・ロマン」と題して講演した。

冒頭、能登と加賀の境界が宝達山の南麓を流れる大海川にあることを紹介。続いて「奥能登」の呼称は、加賀藩の時代に羽咋郡と能登郡を「口郡」、鳳至郡と珠洲郡を「奥郡」と呼んでいた名残だと解説した。

「能登はやさしや土までも」の歌の初出についても説明。加賀藩の武士による「三日月の日記」という書物で、能登で道案内をしてくれた子どもの心遣いを記した場面で引用されているという。「能登は昔から食料が豊富で人々には余裕があった。足元の歴史を見つめ直し、今の暮らしに生かしてほしい」と話した。

東京から珠洲市に移住してきたという志保石薫さん（三五）は「歴史に触れようとすると腰が重くなるが、知識だけでなく自分の暮らしに生きるように学びたい」と話していた。

奥能登塾で能登半島の歴史を解説する西山郷史さん＝輪島市三井町で